

◇子ども村の歴史と課題

回数	日程	実施場所	主催／助成／協力／委嘱	参加者数	スタッフ数	合計数	合計数累計	特徴と課題
1	子ども村 1995, 8, 16-25 (9泊10日)	都城市御池小学校	九州沖縄地方子ども劇場連絡会・子どもの文化学校「子ども村」実行委員会 都城市	76	36	112	112	開村して5日目から子どものパワーが全開し始める。最終日になっても積極的に活動し続ける子どもたちをみて、 10日間の意義 を見いだす。その後各県での実施を目指した。
2	子ども村 1996, 7, 22-31 (9泊10日) 8, 3-12 (9泊10日)	清和村朝日西部生涯学習館小学校跡地	九州沖縄子どもの文化学校	48	14	62	174	子どもの力が発揮される10日間を2回実施。募集を小1からにしたが、1-2年生は年長者との集団生活に無理が生じた。文化学校では、各県組織による九州全域実施を目指す。熊本清和（当子ども村）、鹿児島県、宮崎県の実施だった。
3	子ども村97 1997, 7, 26-10 (15泊16日)	朝日西部生涯学習館	熊本県子ども劇場協議会・九州沖縄子どもの文化学校「子ども村」実行委員会／清和村教育委員会	92	36	128	302	各県からの参加者が増える。経験者が増える。実施期間が長いと中学生の参加が厳しかった。参加人数と施設のキャパシティとのバランスも考慮必要。同時期に清和子どもフェスティバルを開催。
4	子ども村98 1998, 7, 21-8, 30 (最低1週間)	朝日西部生涯学習館	九州沖縄子どもの文化学校、清和村教育委員会／NICE（国際ワークキャンプ）・熊本県子ども劇場協議会／文部省少年交流事業	68	41	109	411	子どもの経験者が多くなり、自ら生活や活動を作り出し蓄積された力を見る。清和子どもフェスを主催者として企画実施大きな達成感をえる。外国人メンバーとのコミュニケーションの機会もあった。入退村がばらついたため、子どもたちから、期間設定の統一を要望される。
5	清和子ども村99 1999, 7, 21-8, 11 8, 16-8, 29 (最低10日)	朝日西部生涯学習館	清和子ども村99実行委員会／NICE・九州沖縄子どもの文化学校・清和村教育委員会／文部省「子ども自然長期体験村事業」	98	34	132	543	文部省の委嘱事業となり、公募。問い合わせが多く参加者が広がる。NICEとの連携もよく子どもたちも青年たちも、やりたいことをやりきった。
6	清和子ども村2000 2000, 7, 24-8, 6 (13泊14日) 8, 14-8, 27 (13泊14日)	朝日西部生涯学習館	清和子ども村実行委員会／NICE・清和村教育委員会・九州沖縄子どもの文化学校／文部省「子ども自然長期体験村事業」	93	53	146	689	文部省の委嘱事業2年目、広範、多数の参加があった。ニーズが高く、希望者を受け入れきれない。開催地を増やす、又は参加日数を増やす事が望まれる。

7	清和子ども村 2001 2001, 7, 29-8-29 (31泊32日)	鶴底公民館・榎原公民館・大塚さん宅・旧白糸第二小学校	清和子ども村実行委員会／NICE・清和村教育委員会・こどもあーと九州沖縄子ども文化芸術協会(設立)／文部省「子ども自然長期体験村事業」	45	29	74	763	文部省の委嘱事業3年目、子ども村を2カ所にする。清和村では、1ヶ月を企画。 参加者に経験年数が多い子どもも増え、初心者、経験者いろいろな対応ができる多様な子ども村を実現するため、スタッフの質の向上が望まれる。
	はき子ども村 2001 2001, 7, 22-8, 4 (13泊14日)	子ども未来館・宝珠山簡易宿泊所・中津江村市ノ瀬公園	はき子ども村実行委員会／NICE・こどもーと特定非営利活動法人九州沖縄子ども文化芸術協会(法人成立)／文部省「子ども自然長期体験村事業」	17	18	35	798	文部省の委嘱事業、ニーズの増加に答えて開催地を増やす。2週間で全員が力を発揮できる子ども村となった。
8	清和子ども村 2002 2002, 7, 28-8, 10 (13泊14日)	清和村鶴底公民館 榎原公民館 2カ所	こどもーと九州沖縄子ども文化芸術協会／子どもゆめ基金助成活動	26	19	45	843	1週目、ホームシックがでる集団が、2週目は自分たちの企画を実行委員会を作ってやり遂げる集団に成長。2週間の参加が定番になる。
	はき子ども村 2002 2002, 8, 17-8, 30 (13泊14日) * 清和とはきを続けて5週間の参加者が1名	子ども未来館・宝珠山簡易宿泊所・中津江村市ノ瀬公園	こどもーと九州沖縄子ども文化芸術協会／子どもゆめ基金助成活動	23	18	41	884	2週目、子どもたち自身で班編制を変え、子どもの村長を生み出した。そして、青年も含めた子ども村役場ができ、子ども村会議のなかでも、よく仲間のことを考え、様々な企画をし実施した。楽しいパワーに満ちていた。
9	子ども村 2003 2003, 7, 27-8, 30 * 参加単位を1週間、2週間、3週間に区切った、5週間の参加者は2名 計34泊35日	清和村鶴底公民館(2週間・中津江村市ノ瀬公園(1週間・きくち水源交流館(2週間(3カ所)	こどもーと九州沖縄子ども文化芸術協会／子どもゆめ基金助成活動	83	37	120	1,004	別途実施のこどもの体験活動指導者養成講座を受け、実施本部長に青年3人があたり、子どもたちをサポートする青年集団ができた。初参加の子どもは1週間、経験者は2-5週間の参加ができ多様なプログラムになった。異年齢のメンバーをまとめ、やりたいことを企画実施する中学生の子ども村役場が活躍した。 子どもたちが仲良くなり、自主的に活動ができるようになるには、2-3週間が必要。長期参加は、拠点を持つことが望ましい。高校生の参加内容は検討が必要。ブルーシートテント。

10	子ども村 2004 2004、7、25-8、27 A、B、Cコース、1、2、3 週間 計 33 泊 34 日 （台風のため 29 日閉村を 27 日に短縮）	菊池市きくちふるさと水源交流館・清和村青葉の瀬・中津江村市ノ瀬公園	こども一と九州沖縄子ども文化芸術協会／子どもゆめ基金助成活動	105	56	161	1,165	10年目の大きな節目の子ども村、たっぷりと大自然の中でともだちをつくろう！10周年の成果と課題を整理し、各県での子ども村が実施できるように、九州沖縄全県から子どもとスタッフを広範囲に募集した。 活動の拠点は、きくちふるさと水源交流館とし、清和、杷木、宝珠山、中津江、阿蘇などへ出かけ、九州沖縄のまんなかで、たっぷりとした自然とあそび、仲間と楽しく暮らした。各地から集まった青年集団をまとめることが大変だった。
11	子ども村 2005 2005、7、24-30 Aコース（1 週間） 2005、8、7-8、27 Bコースは、 1、2、3 週間コース （計 27 泊 28 日）	A 中津江村市ノ瀬公園 B 清和村青葉の瀬	こども一と九州沖縄子ども文化芸術協会／子どもゆめ基金助成活動	63	35	98	1,263	11年目、子ども村の原点にかえる。よけいなモノを削り、大切な要素だけを残そう。体験活動にとらわれ、「子どもの要求実現による子ども自身や子ども集団の成長のための活動」をしていなかったのではないかと、事務局もあにまも全員が子どもの班にはいり、事務局や総務の仕事と分離せず、子どもと共に活動し、子どもの要求や成長変化を感じ、何を準備し子どものやりたい活動を支えるにはどうしたらいいのかをさぐった。子どものための子ども村を子どもと共に再構築する。
12	子ども村 2006 2006、8、6-8、26 3 週間の 1コース （20 泊 21 日） 子ども村 2006	熊本県 山都町下名連石小学校跡地、周辺	こども一と九州沖縄子ども文化芸術協会／子どもゆめ基金助成活動	23	18	41	1,304	今年度、はじめて山都町の紹介で元下名連石小学校区の地域の方々にお世話になり、学校跡地を拠点に子ども村を開催。また、「1-2 週間ならいけたのに」という子どもたちがたくさんいるなか、3 週間に挑戦した初心者が 8 名もいた。下名連石小学校跡という恵まれた環境での生活は、どんな集団づくりをし、何を体験していくかを考え直す子ども村だった。アレルギーアトピーが増え、普通になってきた。
13	子ども村 2007 2007、7/22-8/4 （13 泊 14 日） 2007、8/5-8/18 （13 泊 14 日）	大分県日田市 中津江村	子ども村プロジェクト（こどもあーとから独立・協力関係）／子どもゆめ基金助成活動	33	26	59	1,363	中津江村の民間地に、子どものキャンプ前 2 週間で、丸太の掘立小屋と岩風呂を建設。借用地ながら拠点をもった子ども村のスタートとなった。 事前に野菜を植え収穫したものを料理する活動を加えた。川で大きな鯉をとる、またはつりをするなど自然活動も充実した。しかし、子どもたちはテントで 2 週間過ごすため、雨天時の生活が困難だった。

14	子ども村 2008 2008, 7/27-8/9 (13泊14日) 2008, 8/10-8/23 (13泊14日)	大分県日田市中 津江村	子ども村プロジェクト/ 子どもゆめ基金助成活動	45	28	73	1,436	テントサイトを広げ、テントは、ブロックや木材で床をあげて長期間雨天に耐えられるように設置、生活の場とした。竹とブルーシートのビッグテントの食堂は、雨天が続くときは大変助かった。しかし足元は雨が流れ込みぬかるんだ。サイトを広げたため居住範囲が拡大し、通路づくりなども進んだ。
15	子ども村 2009 2009, 7/26-8/8 (A13泊14日) 2009, 8/9-8/22 (B13泊14日)	大分県日田市中 津江村	子ども村プロジェクト/ 子どもゆめ基金助成活動	A 2 3 B 1 9	1 9	6 1	1,497	開村当初から大雨に見舞われたがその後天気は持ち直し、子どもの経験者も多数となり、子どもの自治活動がすすんだ。子ども企画の実行委員会を、始めて参加した青年スタッフと経験スタッフがうまく組みあい、見守り援助することができ全体がいい集団となった。外国人もリピーターが増えた。
16	子ども村 2010 2010, 7/25-8/7 (A13泊14日) 2010, 8/8-8/21 (B13泊14日)	大分県日田市中 津江村	子ども村プロジェクト/ 子どもゆめ基金助成活動	A 2 9 B 3 3	4 4	106	1,603	洗い場やかまど小屋を別に設置するなど、徐々に施設を拡張していった。子どもは、受け入れ人数に対し希望者が多く安全のために定員にて断るが、スタッフ経験者の就職や大学生が夏休みではないため7月参加が少なく、外国人中心となり、活動やご飯作りに苦慮する場面もあった。また、自治的な活動を支援するスタッフ集団の力量が減少した。
17	子ども村 2011 2011, 7/24-8/6 (A13泊14日) 2011, 8/7-8/20 (B13泊14日) 2011, 8/21-8/27 (6泊7日・ユース中高 生コース)	大分県日田市中 津江村	子ども村プロジェクト/ 子どもゆめ基金助成活動	A 2 2 B 2 8 ユース	3 2	8 9	1,692	7月のスタッフ不足の解消のめどがつかないまま、かろうじて確保している状態。8月はお盆休みを使って参加する職業人もあり多い。子ども参加希望は増加の一步。これまでも片親、祖父母に預けられている子どもはいたが、子どもの生活にいろいろな事情を抱えた子が増えてきた。参加させている保護者の状況も様々となり、社会状況の変化を感じる。また、連続キャンプ5週間+準備後片付けの長期野外生活は相当なスタッフの体力が必要となり、適当な施設がほしい。

18	子ども村 2012 2012, 8/5-8/18 (Ｂｺｰｽ13泊14日) 2012, 8/19-8/22 (Ａｺｰｽ3泊4日) 2012, 8/19-8/22 (3泊4日 コｰｽ中高 生コース)	大分県日田市中 津江村	子ども村プロジェクト/ 子どもゆめ基金助成活動	A 3 4 B 1 4 ユ-ス7	2 7	8 2	1,774	6-7月集中豪雨にて開催地は無事だったが、周辺地域の山や道路河川の決壊で7月開催(A)を断念8月の短期キャンプ(A)に変更。決定していた半数以上は参加できず、参加者も短期の体験となった。短期は子どもの創造力を高める時間はなく、プログラムを消化するだけになる。悪天候が続くと山川の遊びができないため1週間以上の期間がほしい。また子どもの力を引き出すためには、自治活動を経験したスタッフが必要。多くの参加者の受け入れのためには、複数開催のための、事業運営人材・体験指導者・支援者・施設場所が必要である。
19	子ども村 2013 3週間(20泊21日) 8月4日(日)~8月24日(土) 1週間(6泊7日) 8月4日(日)~8月10日(土) 2週間(13泊14日) 8月11日(日)~8月24日(土)	大分県日田市中 津江村	子ども村プロジェクト/ 子どもゆめ基金助成活動	3週間 29 2週間 15 1週間 16 計60 名	3 3	9 3	1,867	中津江の民間地で2007年以来7回目の開催してきた中で、7月から8月上旬のあにまの体制が厳しいこと、天候が不安定なことなどを考慮し、8月中の実施を準備した。子どもの参加者の募集期間を1週間、2週間、3週間として定員を総数24名で予想したが、大幅に希望者が増加し、定員も45名まで倍増して受け入れた。そのため、施設や設備、生活空間が窮屈で、子どもの自治活動に支障が多かった。また、子どもの参加者の増加で、あにまや専門指導者の各プログラムでの対応が難しくなり、安全対策上も生活空間、施設や備品、定員数、各プログラムの見直しが迫られてきた。
19	子ども村 2013 1週間(6泊7日) 8月17日(日)~8月24日 (土)	熊本県菊池市 きくちふるさと 水源交流館	子ども村プロジェクト/ 子どもゆめ基金助成活動	1週間 32	2 5	5 7	1,924	これまでの参加者の増加とともに、中九州からの参加者が減少してきたなかで、菊池での開催を準備し、熊本県を中心に1週間プログラムを開催してきた。中津江との同時開催となり、あにまの体制が十分に取れなかった。体験プログラムは、地元のスタッフが多彩で、多様なプログラムを常時実施できることが成果となった。